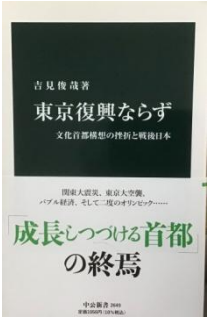
吉見俊哉『東京復興ならず』を読む



写真はこの６月刊行「文化首都構想の挫折と戦後日本」という副題の中公新書であり、多くの知見と示唆を得た。とりあえず本書タイトルに関わるところを抜粋して紹介したい。

歴史的に「復興」の語は、アルカイックなものの復活という観念と結びついてきた。それは古代の復興、失われた伝統や様式の復興、すっかり衰えてしまった家系や生業の復興といった意味であった。だから、災害からの「復興」で巨大な防潮堤が築かれ、地域の昔ながらの風景が失われてしまうことは、この語の原義からすれば完全な逸脱である。被災地を新たな未来に向けて開発することは、断じて「復興」には含まれない。それはむしろ「復興の否定」と言うべき事態なのだ。「復興」は、そもそも未来ではなく過去へのベクトルによって成り立ってきた言葉である。

本書のタイトル「東京復興ならず」には、二重の含意がある。第一に、それは戦後日本の「東京復興」が、文化首都を目指すものから「より速く、より高く、より強い」首都の実現へとひた走る成長主義的な路線に転換していった過程を具体的にたどっていくことになる。敗戦後、戦後復興計画が目指したのは、東京への一極集中化ではなく、より分散的な都市ネットワークのなかに大学街や歓楽街を配置し、緑と文化の首都を実現することだった。このような文化首都としての東京を目指す考え方にとっては、「復興」は「経済成長」というよりも「文芸復興」に近かった。

しかし、東京の未来についてのこの想像力は、やがて高度経済成長への奔流のなかで流産する。実際の東京は、敗戦後に構想されたのとはまったく違う道をたどった。この転換を決定的にしたのは、もちろん 1964 年の東京五輪開催である。

「戦後復興」の達成を祝う世界大の祭典として五輪が準備されていくなかで、東京の水辺の上は首都高速道路で覆われ、都電は廃止されて自動車交通が支配していった。青山通りをはじめとする道路は大きく拡幅され、東京の文化重心は都心北東から都心南西へと移動した。文字通り、東京は「速く、高く、強い」オリンピックシティとなったのである。本書がまず問い返しているのは、この東京が実際にたどった道は、本当に唯一の可能性だったのかという点である。

しかし、このように経済成長路線を邁進した東京の戦後は、そもそもの「復興」とは根本的に異なる過程だった。これが、本書のもう一つの問いである。「復興すること」と「成長し続けること」は水と油の関係にある。「復興」は、仮に部分的に「成長」のモメントを含んでいたとしても回帰的な過程であり、「成熟」に近い。

成熟としての「復興」という概念を、戦後東京はついに獲得しなかった。否、少なくともいまだ獲得できていない。

（2021 年 9 月 15 日）